
メトロポリタンの恋

エール・クリストファ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メトロポリタンの恋

【Nコード】

N8202N

【作者名】

エール・クリストファ

【あらすじ】

念願のメトロポリタン美術館を訪れた日本の大学生まりあ。そこで出逢ったのは、大人の魅力たっぷりの天才トランペット奏者ノアだった。世界の違う彼に戸惑うまりあだったが、ノアは彼女にどんなアプローチしてきて・・・

出逢いの神殿

大学2年の夏 20歳になったばかりの私は
ずっと憧れ続けてきた

ニューヨークのメトロポリタン美術館に
初めて足を踏み入れた

歴史を物語るアジア ヨーロッパ アフリカの貴重な美術品の数々
そこは想像以上に素晴らしい空間で
見て回るだけで 世界旅行をしているようだった

特に1階の一番北側にあるデンドウール神殿が素晴らしかった
それは紀元前15年頃 ローマ皇帝アウグストウスが
ヌビアの都市に建設した神殿だった

1960年 エジプト政府によるダム建設のために
水没する危機に面したヌビア遺跡を
アメリカが多大な援助で救い
そのお礼としてエジプトからこの神殿が寄贈された

巨大な展示室の北側は全面ガラス張りで
優しい光が神殿を照らし出している

ガラスの向こう側には
セントラルパークと五番街の町並みが見える

紀元前の神殿と 現代の景色が美しく交差する
その壮大なスケールに私の心はすっかり奪われてしまった
気が付くと 毎日この展示室に足を運ぶようになっていた

美術館に通い始めて6日目

いつも通り デンドウールの展示室に座り込み

一人で神殿を眺めていた

明日は休館日 ここには来れない

そんな日は 一日をどう過ごしたらいいんだろう・・・

『明日は休館日だね』

不意に隣から英語で声をかけられて びっくりする

見ると黒い服を着た男の人が こちらに笑いかけていた

座っているからよく分からないけど 背が高そう

手も足もすらりと長い

髪は金髪で 短いけれど少しウェーブを打っている
ハンサムそうな顔は 黒いサングラスをかけていて
瞳を見ることができなかった

うーん 大人の男性だ

それもとつても洗練されていて 映画俳優みたい

世界が違うなあ・・・

なぜ声をかけられたのか どう答えていいのか分からず
小さく愛想笑いで答えると その人は嬉しそうに
ぺらぺらと何かを話し出した

でも早口の英語で 何を言っているのか全く分からない

パードン？と首を傾げると　それが分かったらしく
一瞬　口を閉じた後　少しだけ近付いて来て
それからゆっくりと言葉を発してくれた

『昨日もキミを見かけたんだ　毎日来てるの？』

イエス

『ここが気に入ったんだね？』

イエス

うーん・・・もう少し気の利いた返事ができたらなあ
自分の英語力のなさが　うらめしい

とりあえず　ユートウ？　と聞いてみる

『イエス』と私を真似て答えてくれた
ちよつとだけ一緒に笑うことができた

『旅行？』

イエス

『どこから？』

フロム　ジャパン

『オー　スシ　スキヤキ　美味しいね』

お決まりの会話に 少し安心する
旅行者らしき 小さな女の子の私に
気を遣ってくれたのかな

ニツコリ笑って なんとなく感謝の気持ちを伝えると
男性は何やら考えた後 パチンと指を鳴らした

『日本語を話せる女性を知ってるんだ 紹介したいんだけど どう
かな?』

日本語を話せる女性・・・どという人なんだろう?
私が少し戸惑うと 彼は察して

『キャロル・ジョーンズというカレッジの先生なんだ とても素敵
な女性だよ

きっと明日の過ごし方をアドバイスしてくれる』

大学の先生・・・

「アーム ア ストゥーデント オブ カレッジ」

思わずそう答えると 金髪の彼はウンウンと嬉しそうに頷いた

『僕はノア・グレイ』

そう言って 大きくて繊細な手が差し出された
かすかに大人のコロンの香りが漂ってきて
私はドキドキした

握手しようってことよね

「アイム・・・ マリア・ササキ」

言いながら おずおず右手を出すと
フワッと彼の手が包み込んだ
意外なくらい暖かくて優しい感触だった

『マリア キミに会えて嬉しいよ』

そう言いながら 少しだけサングラスを外した
ビー玉みたいに綺麗な水色の瞳があって ドキリとした
彼はパチリとウィンクすると サングラスを戻した

『どのホテルに泊まっているの？』

ホテル教えていいのかな・・・？
でも教えないと 紹介してくれる大学の先生と
連絡がとれないか・・・

いいよね 変な人じゃなさそうだし
ホテルの名前だけなら

「プラザ アテネ」

『良い選択だ』

彼はニッコリ笑って サツと腕時計に視線を移した

『さて残念だけど行かなくてはならない時間なんだ また会おう』

彼が立ち上がったので 私もあわてて立ち上がった
思っていた通り とても背が高い
並ぶとまさに 大人と子どもみたいだ

「サンキュー ミスター・グレイ」

『会えて嬉しかったよ マリア じゃあまたね』

軽く手を振ってから 彼は歩き出した
スタイルが良くて 洗練された動きが すごくカッコいい

それは他の人の目から見てもそうだったらしく
パツと周囲の視線が彼に集まった

でも彼はそんなことなど全く気にかけずに
さっさとその場を歩き去っていった

注目されることに馴れてるのかな・・・

足音と共に 大人の甘やかなコロンの香りも遠のき
私は少しほっとした

エイブリー・フィッシャー・ホールの楽屋裏に
シルバーのリムジンが横付けされる

黒服の男達が車を降り ドアを開けると

金髪をなびかせた 背の高い白いスーツの男性が
素早く通り抜けた

足早に廊下を進むと 個人用の控え室の中に
馴れた様子で入っていく

部屋のプレートには
エイダン・プライスと書かれている

ニューヨークのシンガー エイダン・プライス
大学時代にデビューした彼は

天使のごとき澄んだ歌声で その比類無き才能を認められ
若くして成功を収めた

クラシックのみならず ロック ポップス カントリーまで歌いこ
なし

信望者は若者に止まることなく 高齢層にまで広がっていった

天使のごとき と称されるのは 歌声だけではなかった
輝く金色の髪 宝石のような緑色の瞳
そして繊細な顔立ちと 魅力的な微笑は
古い寓話に登場する天使を 現代に蘇らせたようだった

しかし本人はそんな自分の容姿にはあまり関心がないらしい
控え室の鏡には一瞥もくれず 椅子にドカリと座り
長い脚を持て余すように組んで その上に肘をついた

そしてじっと目を閉じ 静寂の中で心を落ち着かせる
それが歌う前の 彼の常だった

バタンッ

「エイダン！」

彼の貴重な静寂を 打ち破る不遜な人間がいた
無二の親友であり 彼と肩を並べる美貌の持ち主でもある
トランペットの天才奏者 ノア・グレイだ

繊細で優美なエイダンが大天使ガブリエルならば
精悍で男っぽいノアは軍神マルスだった
彼らは音楽界のプリンスとして常に注目を集め
その女性関係はゴシップ誌のみならず
新聞でも取り沙汰されるほどだった

軍神マルスはいつもクールな顔を珍しく上気させて
エイダンの向かいにドカリと座った

「エイダン 聞いてくれ！ とうとう会話したんだ！」

エイダンは目を閉じたまま 首を振った

「ノア・・・ この時間がオレにとってどれだけ大切か
分かっているはずだろう」

しかしノアは引き下がらない
体内で沸騰した血液は 冷めることなくフツフツと煮えたぎっている

「エイダン！ お前にこれを話し終わらないことには
オレはとてもしハースルなんてやる気にはなれない」

エイダンが大きく溜息をつき あきれ顔で親友の顔を見た

「分かった分かった・・・ 今週になってキミが急に騒ぎ出した
黒髪の天使だね その幻影の話を聞いてあげるよ」

「幻影じゃなくなったんだ！ とつとう会話できたんだよ！」

ノアは水色の瞳をキラキラ輝かせて言った

「美しい漆黒の髪 輝く黒曜石の瞳 ルビーのような赤い唇
月曜日にデンドウル神殿で見た時 オレは心臓が止まるかと思
った

もう一度会いたくて火曜日にも行き 再び会うことができた
水曜日も 木曜日も・・・そして6日目の今日
とつとう声をかけたんだ！」

まるで少年のような表情の友人に エイダンは皮肉な笑みを浮かべる

「ふゝん ニューヨークで最もセクシーなプレイボーイと呼ばれて
久しいキミが

随分 退屈な朝を過ごしていたんだね

この6日間 キミに門前払いを食った美女達に 心から同情する
な」

「そんな話はどうでもいい！ 今はオレのマリアの話だ」

「マリア？ マリアという名だったのか」

そう返されて ノアはハツとした

そして眉間に皺を寄せて エイダンを斜めに見る

「お前に彼女の名前を口にされるのは 嫌な気分だな」

エイダンはあきれ顔で肩をすばめた

「男の嫉妬は見苦しいぞ まあキミが嫌なら今まで通り
黒髪の子供と呼んであげるよ」

エイダンはふざけた口調だったが ノアは真顔だった

「フン 彼女にキミを紹介するのはよそう
黒髪の子供が 金髪の子供に 親近感を抱かないとも限らないか
らな」

「はいはい それでキミはもう一度会う約束を取り付けたんだね？」

その問いに ノアは急に語気を弱めた

「いや・・・ そんな急に誘ったりしたら
彼女はオレを疑って 逃げ出してしまいそうだった」

エイダンは目を丸くした

「何言ってるんだ！ お前はノア・グレイだぞ！
ニュー・ヨークに お前に誘われて逃げる女などいるものか」

ノアはせつなそうに首を振る

「いや 彼女はニュー・ヨークの人間じゃない」

日本から来た学生だった 英語も片言しかしゃべれない
そしてオレのことを全く知らないんだ」

「ヒュ」 それは確かにドラマだね」

エイダンはい少し興味をそそられたようだった

「それで 何を話したんだい？ 観光ガイドとでも偽ったのか？」

「ああ・・・そうか そういう手もあったか・・・」

「おいおい・・・ バカ言うな お前なんかガイドをやったら
くだらない記者たちに ネタをふりまくようなものだぞ
それで？ なんて声をかけたんだ？」

「・・・明日は休館日だね って」

がくりとエイダンが肩を落とした

「おい お前 正気か？ それでお天気の話でもしたつてのか
数え切れないほどの美女とつきあってきた お前が？」

「エイダン・・・ お前は彼女を見ていないからそんなことを言う
んだ」

ふん と含みのある顔つきで エイダンはノアの顔を見た

「なるほど これは興味がわいてきたな その彼女に」

するとノアが真っ赤な顔で ガタンと立ち上がり

すごい勢いでドアの方へ歩き出した

エイダンがあわてて彼の腕をつかみ 制止する

「わ 悪かった悪かった！ 冗談だよ冗談！

謝るから キミの天使に興味など断じて抱かないから
話を最後まで聞かせてくれ」

するとノアが情けない顔で振り返り ドサリと再び椅子に腰を下ろした

「彼女のホテルへ キャロル・ジョーンズに行ってもらうことにした」

「ああ オレたちの大学時代の同士 キャロルかなるほど 彼女は東洋音楽に傾倒していた頃
日本に1年間留学した経験があったな」

「そうだ キャロルにオレのことを説明してもらって明日のステージに彼女を招待する」

「ノア 明日は満席だぞ？」

「いや 国務長官が予約していたボックス席が
急な政務を理由にキャンセルになったんだ
そこを彼女にプレゼントする そして・・・」

「そして？」

「演奏後に 彼女にプロポーズする」

ガタッ！

エイダンはあまりの驚きに飛び上がった

「ノア！ 気が狂ったか？ 両手で数え切れないほどの
ガールフレンドたちは どうするんだ？」

「ああ 彼女たち？」

そう行つてノアはポケットから携帯電話を取り出す
そして水の入ったカラフェに歩み寄り
躊躇無くその中へ ポトリと落としてしまった

「ノア！」

「これで彼女たちと連絡をとることは無くなった
オレはまっさらな状態で 彼女にプロポーズするんだ」

エイダンは親友の口から発せられた 信じられない言葉に
呆然と立ちつくした

「オレがお前に伝えておきたかったことは ここまでだ
お前は親友だからな じゃありハ―サルへ行こう」

全てを告白し すっきりした様子のノアは
明るい表情でそう言つと エイダンの部屋を出て行つた

残されたエイダンは 凍り付いたままドアを見つめていた

昼食の最中だったキャロルのもとに 旧友のノアから電話があった
彼は相変わらず相手の都合など考えようとしない
パスタを頬張ったままの私に 強引な頼み事をするのだ

大学が終わった後 プラザ アテネに宿泊中の
マリア・ササキに会って欲しい
そして明日のニューヨークフィルとの公演に誘って欲しい

席は国務長官が座る予定だった ボックス席ですって！

赤毛美人のキャロルは ホテルへ向かうタクシーの中で
大きな溜息を何度もついていた

彼にガールフレンドがたくさんいるのは知ってるわ
でもその中に日本人もいたなんてね

デートへ誘うのに私を担ぎ出すってことは
その子はきつと英語が苦手なんだわ

再びキャロルは溜息をつく

でもオマケのボックス席は悪くないわね
そこから彼らのステージを見れるなんて
こんな贅沢なことはないわ

でもそれくらいじゃ この貸しは帳消しにならないわよ ノア

旧友の名前を 呪うように唱えながらキャロルはタクシーを下りた
そしてもう一度 溜息をついてから プラザ アテネへ入っていった

「ミズ・ジョーンズがロビーでお待ちです」

客室係に案内されて マリアは1階のロビーへ下りた

アンティークのソファに腰掛けていた赤毛の女性が
すっと立ち上がって 右手を出してきた

「初めまして ノアの友人のキャロル・ジョーンズです」

流暢な日本語だった

マリアは彼女の優しそうな雰囲気
ほっとしながら 握手を交わした

「初めまして 佐々木まりあです どうぞよろしく」

キャロルは握手を交わしながら 内心は驚いていた

小柄で幼い印象はあるけれど
なんて綺麗な子なんだろう・・・
黒い髪と黒い瞳がつやつやと輝き
なめらかな肌は真珠のよう

まさに東洋の真珠だわ

私たち西洋人にはどうあがいても
手に入れることができない美しさ

なるほど グラマラスな美女ばかり相手にしてきたノアには
神が遣わした天使に見えたのかもしれないわ

「あちらのラウンジでお茶でもしながら話ませんか？
五つ星のホテルの紅茶はきつと美味しいわ」

本当はノアから頼まれた伝言をさつさと伝えて
早々に帰るつもりでいた

でもマリアを一目見て キャロルの中に好奇心が芽生えた

この子を相手にノアが 今までのガールフレンドと同じような
つきあいをするとは考えられないわ
じゃあどういいうつもりで 彼女を誘おうというのかしら

「私はノアと大学時代 同級生でした
マリアはどこで ノアと知り合ったの？」

ラウンジで紅茶を注文してから キャロルはそう切り出した

「今朝 メトロポリタン美術館で 声をかけられたんです
多分・・・ 一人でポツンと座っていた旅行者の私を
気遣って下さったんだと思います」

「へえ 今朝？」

「はい」

キャロルは再び驚いていた

そんな相手に国務長官のボックス席？

何考えてんのか まったく分らないわ・・・

「あなた とても綺麗ですね

ニューヨークにいと 男性によく声をかけられるでしょ？」

そう聞くと マリアは恥ずかしそうに少し頬を赤らめた

「確かにいろいろな男性から声をかけられました

若いかたから 大人のかたまで

ニューヨークの男性は積極的ですね」

ちょうどそこへ紅茶を運んできたボーイも

マリアの顔にチラリと視線を送っていた

「その中に ホテルのオーナーとか

化粧品会社の副社長とか 書かれた名刺を

下さった方もいました 本当でしょうか・・・？」

マリアは自分のバッグからそれらの名刺を取り出し

キャロルに見せた

キャロルはそれを見て溜息をついた

「名刺は本物のようですね ただ本人かどうかは不明だけど」

言いながら ノアが直接マリアを誘わなかった理由が
分かったような気がした

マリアはキャロルの言葉に 困惑しているようだった

「ごめんなさい 不安にさせてしまつて
またこういうことがあつたら 私に言ってもらえれば
力になりますよ」

マリアはそれを聞いて ぱつと顔を上げて
嬉しそうに微笑んだ

「ありがとう キャロルさん 心強いです」

その綺麗な笑顔に 女性のキャロルでも頬を赤らめた

「大丈夫 ノアは嘘の名刺を渡すような人ではないから」

そう言いながら キャロルは1冊の雑誌を取り出した

「ピープル誌の世界で最も美しい50人
ほら ここにノアがいます」

キャロルが開いたページを見ると
確かにデンドウール神殿の前で出逢つた人と同じ
水色の瞳の男性の写真が大きく載っていた

NOAH GRAY - American jazz trum
peter

「トランペット・・・」

「そう 彼は有名なトランペット奏者です
天才と言われ アメリカで彼を知らない人はいないほどです」

マリアは驚いて 華奢な手を口に当てた

「そんなすごい人を 知らなかったなんて・・・
恥ずかしいです ミスター・グレイは
気を悪くされたんでしょうか？」

戸惑うマリアに キャロルは笑ってみせた

「いいえ 彼はあなたを明日の演奏会に招待したいと
言っています でも・・・
予定はありますか？ 旅行はお友達と一緒にですか？」

「あ はい 友達と一緒にですけど
私だけどうしてもメトロポリタン美術館に毎日通いたくて
別行動になってしまったんです
だから明日休館日なので どうしようかと考えていたところで・・・

ミスター・グレイはそのことに気付いたのかもしれないね」

それだけで、ボックス席？

キャロルはいぶかしんだが 表情には出さなかった

「そうですね では明日は私と一緒に
ノアの演奏会に行けますね」

「はい・・・ でも私なんかいいんでしょうか？」

ミスター・グレイのことを知りもしなかったのに・・・」

「彼自身から招待をされたのだから
遠慮することはないですよ」

「そうですか・・・ 嬉しいです
ミスター・グレイにありがとうございますと
伝えて頂けますか」

嬉しそうに 輝く笑顔を見せるマリアに
キャロルもつられて 笑顔になる

「伝えておきましょう」

リハーサルが終わったノアは エイダンの控え室へ直行し
彼の携帯電話から キャロルへ電話した

キャロルはひどく機嫌の悪い様子で電話に出た

「なんであなたの携帯がつかまらないの！ メッセージも残せない
じゃない」

「ごめん 壊しちゃってさ それで彼女に会えた？」

「あゝら・・・」

めずらしくしおらしいノアの声に刺激され　キャラルの意地悪度が上昇する

「随分 彼女のことを気に掛かるようね
一体 どういう関係なのかしら？」

「そんな意地悪言わずに　どうだったか教えてくれよ」

「ふふん そうね　来月のあなたのステージには
私だけでなく家族全員を招待してちょうだい」

「やすいご用だよ！　同じボックス席で招待しよう！
だから早く結果を教えてくれ」

キャラルは電話口で大きく溜息をついてから答えた

「まあ結果から言うと　ミッション・コンプリートよ
ちゃんとあなたのことを説明して　明日のコンサートの約束も
取り付けたわ」

「わお！　ありがとうキャラル！　一生恩にきるよ！
来月のボックス席も必ず用意する！　約束するよ！」

ガチャリッ　ツーツーッ・・・

まあなあに　あのはしゃぎっぷり・・・

まったく何が彼をあんなティーンエイジャーの少年のように
変えてしまったのかしら・・・

とにかく明日のマリアとノアの対面の瞬間を見れば
きつとどういふことが分かるはずだわ

キャロルは携帯電話をもう一度手にして
家族の番号をダイヤルした

出逢いの神殿（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます

初めてオリジナルのロマンス小説を書いています

登場人物をとて愛しているので

がんばって完結させたいです

応援よろしく願いたします

この物語は完全なフィクションです

登場する人物や団体は実在のものと一切関係有りません

恋するトランペッター

窓から差し込む朝の光の中

ゆっくりと覚醒していくノアの脳裏には マリアの姿があった

マリア・・・ マリア・・・

風に揺れる可憐な花

あの輝きに満ちた優しい笑顔が忘れられない

ゆらりと 起き上がり

まぶしさに目を細めながら 窓の外を眺める

彼女のことはかり考えて ほとんど眠れなかったな・・・

一体どうしたんだろう オレは・・・

こんなことは 生まれて初めてだ

今夜が待ち遠しい 待ちきれない

今すぐにでも 会いに行きたい・・・

いや・・・それじゃまるでストーカーじゃないか

ノアは暴走しそうになる思いにブレーキをかけようと
目を閉じて右手の拳をギュッと握った

しばらくそのままじっとしていたが

やがて何かを決意して顔を上げると

素早く身支度し 足早に部屋を出て行った

さわやかな朝の風が

マリアの部屋のカーテンを静かになびかせる

今朝も彼女はルームサービスの朝食を楽しんでいた

このホテルはサービスも素晴らしいけど

ルームサービスの食事も素晴らしい

運ばれてきたワゴンに飾られた 真っ赤なバラも素晴らしい

若い彼女には少々贅沢な五つ星ホテルだが

彼女や友人の裕福な親たちが

初めてニューヨークに滞在する娘たちのために

最も信頼できる滞在場所としてここを選んだ

マリアはその取り計らいに心から感謝していた

数日前から友人達はフロリダへ海水浴へ行き

マリアは彼らが戻る明後日まで一人になってしまったが

それでもこのホテルに滞在している限り

寂しいとは思わなかった

ホテルのスタッフがまるで昔からの家族のように

暖かく接してくれるからだ

そして何より このホテルはメトロポリタン美術館を始め

ホイットニー美術館 グッゲンハイム美術館

フリックコレクション アメリカ自然史博物館などへ

いずれも歩いて行ける距離にあった

彼女はこのホテルと美術館さえあれば

1年だって2年だって一人でいられると思った

ふと ワゴンの薔薇に カードが添えられているのに気付く
昨日までは無かったものだ

マリアは首を傾げて カードに手を伸ばし 中を開く

『朝食を食べたら 一緒に出かけよう

ロビーで待っている ノア・グレイ』

「ミスター・グレイ・・・？」

マリアはびっくりし あわてて朝食を食べ始めた

そしていつものようにお皿を綺麗にすると

まだ熱い紅茶をなんとか喉に流し込み

大急ぎで身支度をした

ロビーには黒いハンチング帽にサングラスをかけたノアが
長い脚の上に新聞を乗せて 座っていた

マリアはすぐにその姿を探し当て

彼が気付くより前に駆け寄った

「ミスター・グレイ」

控えめな声に 彼が新聞から顔を上げると
少し困ったような表情のマリアがそこに立っていた

薄い水色のワンピースと白い帽子が よく似合っている

ノアは自分の胸が高鳴るのを感じながら
立ち上がって マリアに視線を合わせ
高い鼻に指を当てた

『ボクはノア ノアと呼んでくれ マリア』

「ノア・・・」

マリアが戸惑いながらそう口にすると 彼は満足そうに頷いた

『マリア 急に呼び出して悪かったね

今朝は予定ある？ もし無ければ案内したい場所があるんだ』

メトロポリタン美術館での時と同じように

ノアはゆっくり聞き取りやすいように話しかけた

マリアは注意深く耳を傾け そして頷いた

ノアは内心 嬉しさに飛び上がりたいほどだったが
ぐっところえた

ここはいつものオレらしく 落ち着いていかなくては

『車はホテルに預けたんだ

散歩しながら行こう ここからならすぐだよ』

散歩と聞いてマリアはほっとした

もし車にと言われていたら 断っていたかもしれなかった

きっと子どもみたいな私の面倒を見たくなったのよ
彼は親切で世話好きな人なんだわ

自分の中でそんな回答を見つけ　マリアは満足することができた

横顔を見上げると　帽子とサングラスの下で鼻歌を歌っている
クールなイメージだったけど　意外と陽気なんだ・・・

右手にはピカピカのトランペットケース
散歩の時も持ち歩くのね・・・

そんな彼の様子を見ているうちに
マリアの頬には　自然と笑みが浮かんできていた

少し歩くと高級ブティックが並ぶ五番街に出た
しかしまだ朝早かったために　どの店も開店前で
通りはひっそりとしていた

マリアはお気に入りのお店でもあるのかな？と思ったが
ノアは店になど一瞥もくねずに　どんどん歩いて行く

やがて見えてきたセント・パトリック聖堂の前で
彼は足を止めた

『ここだよ　来たことあった？』

マリアが頭を横に振ると　ノアはニッコリ笑った

『キミの初めてに付き合えて ラッキーだよ 中に入るっ』

そう言ってから シーツと指を口に当て
扉を開く 中は礼拝の最中だった

彼は馴れた様子で足音を忍ばせ 空いている席を見つけて
マリアを座らせた

そしてサングラスを少しずらして ウィンクをし
足早にさっと消えてしまった

なんだろう？とマリアが首を傾げていると
祭壇の方から賛美歌が聞こえてきた

荘厳な聖堂の中に響き渡る 美しい歌声
それにしばらくうつとりと聞き入る

2曲歌い終わったところで 聖堂が静まりかえった
何かを待つかのように 無音の時が続く

やがてその沈黙を破り 新たな音色が響き渡った
それは高らかに賛美歌を奏でるトランペットだった

ノア……？

祭壇へマリアが視線を走らせると
そこにトランペットを一人奏でるノアの姿があった

その調べは 時に優しく 時に悲しく

情感に波打つ水辺のように

神への切ない思いに 満ちあふれていた

なんて音色を奏でるのだろう この人は！

マリアの心は その美しさに 打ち震え

身体が金縛りにあつたように 動かなくなっていた

悲しみ 喜び 怒り

様々な感情を ノアのトランペットを歌い上げる

その美しさは 大聖堂に集う人々の心を
完全に奪っていた

やがてゆるやかにトランペットの賛美歌が終わった
それまで沈黙していた観衆は

一斉に立ち上がり 拍手と歓声で

天才トランペッターの素晴らしい演奏を讃えた

マリアは割れんばかりの歓声の中
一人 身動きできないままだった

『マリア マリア！ 大丈夫？』

ノアに心配そうに覗き込まれて マリアはハッとする

そしてあわてて 大丈夫大丈夫 と手を振って見せる

『ごめん 旅行者のキミを疲れさせてしまったね
今夜のコンサートまで 部屋でゆっくり休んでおくんだよ』

本当は帰り道に ノアは五番街でマリアとワンピースを選び
プレゼントするつもりでいた

でもあまりに彼女が上の空だったので
これ以上 連れ回してはいけない気がして
真っ直ぐにホテルまで連れて帰ったのだった

マリアの心はまだ ふわふわと宙に浮いているようだった
なぜ 私はこんなにすごい人と 一緒にいるのだろうか？
まるで別世界だ

『それじゃあ また後で』

名残惜しそうにノアがそう言って 右手を差し出す
マリアはその大きくて繊細な手を握りながら 口を開いた

「サンキュー ミスター・グレイ」

「ノー！」

反射的にノアが叫び マリアがビクリとする
驚いて見上げると 彼が唇を噛んで首を振った

『ごめん・・・』

そしてサングラスを外し　その綺麗な水色の瞳で
じっとマリアを見つめた

『ごめん　でもキミにそんな風に呼ばれると
オレはとても悲しくなるんだ』

そう言いながら　まるで彫像のように美しい顔が苦惱でゆがみ
マリアはその視線の先で　どうしようもなく胸が苦しくなった

『どうかオレのことは　ノアと呼んで欲しい　これからずっと
お願いだ』

聖堂で聞いたトランペットの音色のように
水色の瞳がせつなく揺れていた

マリアは思わず視線をそらしながら　口を開いた

「ノア・・・」

ノアはうつむいて　サングラスをかけ直すと
そのまま黙って　ホテルの出口へ向かって行った

「はああああ・・・」

エイブリー・フィッシャー・ホールの控え室で
ノアは情けないほど深い溜息をついていた

「どうしたノア 今日には念願の彼女が客席にやって来るんだろ？」

いつもとあまりに違う様子に クスクス笑うエイダン
そんな彼を怒る気力さえ 今のノアには無かった

「今までの女はみんな オレのトランプットを聞かせれば
感激して抱きついて来たんだ それが・・・」

「黒髪の天使は違ってたって訳か？」

「違っていたどころか・・・！
心が離れてしまった 余所余所しくなった エイダンなぜだ？」

「うーん・・・」

ちよつと考えてから エイダンはニヤツとして答えた

「つまり キミがスーパースターな面を 彼女に見せ過ぎたんだ
庶民派で現実的な彼女は 住む世界が違ふと思って 一歩引いて
しまったのだよ」

「エイダン・・・」

ノアは水色の目を見開いて エイダンに詰め寄った

「すごいな・・・ そうだ その通りだよ」

そして次の瞬間 ガクツと肩を落とした

「じゃあ 今日のコンサートに招待したのは 大失敗ということじゃないか

ニューヨークフィルと演奏するところを1時間以上も見せたら もう彼女はボクの呼び声にも反応してくれなくなってしまうかも・
・・」

エイダンは今にも泣き出しそうな親友の肩をポンポンと叩いた

「こうなったら仕方ない キミは愛さずにはいられないスーパースターになるんだよ

世界が違っけれど 愛しくて仕方ない 彼女にそう思わせるしかない」

「世界が違っけれど 愛しくて仕方ない・・・」

ノアはぼんやりとその言葉を繰り返した

「それはまさに オレの彼女に対する今の気持ち そのものだな
つまりオレの心を 彼女に伝える もうそれしか出来ないということだ」

「その通りだよ ノア」

ノアは自分の肩にあったエイダンの手を がっちりと握った

「ありがとうエイダン やはり持つべきものは友だ!」

真剣なノアの視線の先で エイダンは苦笑した

やれやれ これはどうやら本当に冗談じゃ済まされない事態になっ

てきたかな

「キャロルさん こんな服しかなかったの 大丈夫でしょうか？」

キャロルが部屋へ行くと

マリアは不安げな表情で彼女を迎え入れた

見るとシンプルな黒いワンピースを着ている

品の良い形で 若々しさをよく引き立てていた

このまま会場へ行っても むしろそのシンプルさ故に

彼女の美しさが際だって 視線を集めることだろう

キャロルは思わず溜息をついた

「ノアはあなたがそういう服装で来ることを 予測していたようね」

そして手に持っていた紙袋を マリアへ差し出した

「彼からのプレゼントです 昼間のお詫びにと言っていました

今朝 彼が直接ここへ来たんですって？ 驚きました」

中には大・中・小 3つの箱が入っていた

「こんなにたくさん・・・」

「まあとにかく コンサートまであまり時間がないので

急いで開けましょう 手伝いますよ」

そう言うと キャロルはさっさと大きな箱から取り出して
包み紙を破いていく

最初に現れたのは 黒いサテンの靴だった

「なるほど そうねヒールはこのくらいの高さがニューヨークでは
標準ね」

ヒールの高さは約7センチくらいだろうか
マリアが足を入れると すっと収まりよくはまった

「ワオ サイズもピッタリね では次は・・・」

続けてガサガサ包み紙をはがす

次に現れたのはオールドローズがプリントされた
シルクオーガンジーの ピンクのストールだった

「まあ素敵 あなたによく似合うわ」

マリアがまとうと オールドローズの優雅な花びらが
真珠色の肌に滑らかに沿って美しかった

「そして最後のこれね！ ああこれは あなたが自分で開けてみて！
もうあまり時間がないから 急いでね」

一番小さな箱を マリアがあわてて開ける
中からは美しいネックレスが現れた

豪華すぎず シンプル過ぎず 控えめにダイヤとルビーが並んでいる

それは彼女の繊細な首と鎖骨のラインに ピタリと寄り添った

「完璧ね！ では行きましょう！」

何か言いたそうなマリアに その隙を与えず

キャロルはノアからのプレゼントを全て渡すというミッションを完了した

そしてコンサートの開始時間までにボックス席に座らせるとい
次のミッションへ向けて早足で歩き出した

私をガイドとして一緒に来させたのは 正解だったわね ノア
エイブリー・フィッシャー・ホールのロビーに立ち
キャロルは内心でそう思っていた

マリアの子鹿のようにしなやかなスタイルと
真珠のように輝くなめらかな肌に
男達の視線は釘付けだった

思わず声をかけそうになる男性を見かけると
キャロルはすかさず間に割り込み
そのタイミングを外していった

ボーナスを上乘せしてもらう必要があるわね・・・

「さあ 私たちの席は上よ 奥のエレベーターに乗りましょう」

キャロルは早くこの人混みから 抜け出したかった
そんな彼女の後を マリアはあわてて追った

エレベーターの前に立つと ちょうど上から下りてきたところだった

チン ガチャリ

重厚な扉が開く

すると中に 白いスーツを着た背の高い金髪の天使が立っていた
エイダン・プライスだった

『キャロル!』

『エイダン! 久しぶりね!』

マリアはエイダンの美しさに驚き 目を見開いた

こんなに綺麗な男の人がいるなんて・・・

『友達にあいさつに行こうと思って 下りてきたんだ
だけどキミたちに会えるとは思わなかった ラッキーだな』

金髪の天使はいたずらっぽい笑みを浮かべた
それがまた美しく マリアは見とれるばかりだった

『ノアから キミが可愛い友人を連れてくるって聞いてたよ
こちらかな?』

キャロルの背後に隠れるように立っていたマリアを
エイダンは覗き込んだ

彼女は頬をバラ色に染め　キラキラした瞳で彼を見上げていた

エイダンがドキリとした

これは・・・　確かに今までに出逢ったことのない美しさだ
まるで朝霧の中に現れた　妖精のようじゃないか

シンプルなワンピースに柔らかいストールをまとった今の姿も素晴らしいが

純白や深紅の華やかなドレスを身につけたら　更に輝くかもしれない
彼女の細い首や腕を　真珠で飾ったらもっと美しいかもしれない
そんなことを想像して　エイダンはゾクリとした

まずいな　この娘を見ているとそそられる・・・

『マリア・ササキ　ノアの大切なゲストよ』

エイダンの表情に何かを感じ取ったのか
キャロルはそう言った後　彼の耳元に近付いて小さく付け加えた

『マリアにちよっかい出すと　ノアに殺されるわよ』

『重々　承知してるよ』

エイダンは苦笑した

殺される前に殺すか・・・
そんな凶暴な思いが一瞬よぎったが
頭を小さく降って　かき消した

『OK ノアの大切なゲストを ボクも席までエスコートしよう
友達に挨拶するよりも こっちの方が大事な仕事だ』

エイドンは優雅に 女性二人を中へ招き入れて
エレベーターのボタンを押した

「彼はエイドン・プライス 今日ゲスト出演する歌手です」

「歌手……」

マリアが優美な顔を見上げると 天使の微笑みが降ってきた

『すっかり自己紹介が遅れてしまったね よろしくマリア』

彼はサツと彼女の手を取り 自分の唇に当てた
かすかな感触に マリアの頬が赤くなる

『エイドン……』

キャロルが眉をつり上げると 彼は声をたてて笑った

『キャロル 怖い顔するなよ 単なる挨拶だよ』

そう言いながら 名残惜しそうにマリアの手を離れた

「キャロルさん きつとミスター・プライスも有名なかたなんですネ
私 また失礼なことをしてしまったわ……」

不安そうなマリアに キャロルは微笑み返した

「大丈夫 あなたが不安になるようなことは 何もありませんよ」

『キャロル 彼女は何て？』

問いかけるエイダンを キャロルはキツとにらみ返した

『不安がつてるのよ！ まったく

余計なことはしないでおいでよ！』

3人はボックス席に入った

ホール全体を見渡せる その眺めの素晴らしさに
マリアは感嘆の声を上げた

「すごい！ こんな席でいいんですか 私？」

「たまたまこの席がキャンセルになったんです

他は満席だったから ここしかなかったんでしょう
気にすることないですよ

あまりキョロキョロしていると目立ちますから
座って下さい」

マリアはその言葉に顔を赤らめ はいと答えて
恥ずかしそうに椅子に座った

『じゃあボクは行かなくちゃ 残念だけど またねマリア』

エイダンはそう言って 今度はマリアと握手を交わし
茶目っ気たっぷりな表情でウィンクしてから
ボックス席を出て行った

「すごく綺麗なかたですね ミスター・プライス」

「そうですね 彼もちろん ピープル誌の50人に選ばれています

まったく私の知る男性は美しい人ばかりで
自分がかすんでしまうから 嫌なんです」

「そうですね」

マリアはクスクス笑った

その頃 エイダン 自分の控え室に戻り
いつものように椅子に座って 目を閉じた

これから始まるステージに集中しなくては

しかし なかなかうまくいかず
少しして彼は溜息をついた

マリア キミはなんてボクの心を落ち着かなくさせるんだろう・・・

そんな思いを追い払うように 何度か頭を振って
エイダンは再び集中を始めた

「そうだ マリアに渡すものがありました」

ボックス席で マリアはキャロルから
白いカードを受け取った

それはホテルのルームサービスのワゴンに
添えられていたものと同じものだった

開くと やはりノアの筆跡だった

『マリア 今日の曲は全てキミへ贈るよ
でもそのことは 他のオーディエンスには
くれぐれも内緒にね ノア・グレイ』

それを読んで マリアは今朝の
ハンチング帽をかぶって 鼻歌を歌っていたノアの姿を思い出し
クスリと笑った

キャロルはその様子を見て言った

「コンサートが終わったなら 控え室に来てって言われているんだけど
行きますか？」

マリアは頷いた

「はい プレゼントのお礼もしなくちゃいけないし」

「そう ノアが喜びます 良かった

あ 始まりそうですよ」

ステージでニューヨークフィルのメンバーがスタンバイを始めた
ざわついていた観客席にも 緊張の空気が走る

やがてホールの中の全ての人間が 決められた席につき
コードを確認する楽器の音だけが響き始める

そして沈黙の後 指揮者が登場し 拍手がわき起こった

マリアはドキドキしながら ステージを見下ろしていた
今朝の大聖堂でのトランペットの響きを思い出し
オーケストラと一緒にだど 一体どんな音になるのだろうと
わくわくする胸を 押さえられずにいた

ステージの明かりが消える

そしてスポットライトを浴びた背の高い男性が登場した ノア・グ
レイだ

黒いスーツを着た精悍な姿は 素晴らしくスタイリッシュだった

ホールは満場の拍手で満たされた

彼はそれに軽く手を振って答え サツとトランペットを口に当てる

その動きに反応して 瞬時に静まりかえるホール
最初に響き渡ったのは

トランペットがせつなく奏でる アヴェ・マリアだった

ゾクリとマリアは鳥肌が立つのを感じた

なんてすごい・・・

大聖堂の時もそうだったが 広いホールを埋め尽くす観衆が
一瞬にしてノアの音色に 飲み込まれていく

彼の華麗な指の動きに 誰もが心を奪われていく

大人の男性の 迫力と色気と哀愁が

この場の空気を余すことなく占領していた

なんだか酔ってしまいそう・・・

マリアは頭の芯が痺れるのを感じた

次の曲は 古いラブソングだった

どんな曲でも こなしてしまう

美しく 完璧に

マリアの心はどんどん彼に引き込まれ

胸の鼓動は早くなっていった

胸が騒いで苦しい

でも ずっと聴いていたい・・・

しばらくすると ステージに白いスーツの男性が現れた

金色の髪 エメラルドの瞳 魅惑の微笑を浮かべる天使

エイダン・プライスだった

沸き上がる歓声が 優美な彼を包み込んだ

天使の白い顔が 空をあおぐ 目を閉じて

そしてジャズのラブソングを歌い始めた

甘く 美しい バラード

どこまでも澄んだ響きは まさに天上の歌声だった

やがてトランペットとのデュオになり

せつない恋の歌は クライマックスを迎える

マリアの心は震え 気付くと頬に涙が流れていた

この世に崇高なる音楽を与え賜った神に
誰もが感謝する

それは そんな夜だった

恋するトランペッター（後書き）

ここまで読んで頂き ありがとうございます
第一部を書いた勢いで 一気に第二部も書き上げました
さてこらからの展開が 難しいところです

*この物語は完全なフィクションです
実在する個人や団体とは一切関係ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8202n/>

メトロポリタンの恋

2010年10月10日12時02分発行